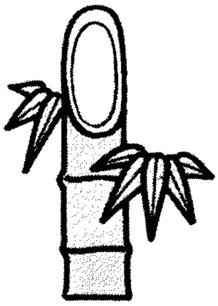


音の散歩路

～京都音風景・風神の楽器・竹林の静寂～

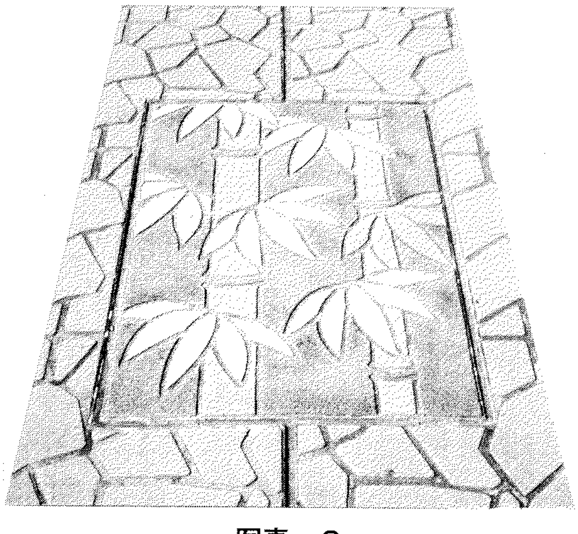
阪急京都線の桂駅からバスで10分位の丘の上に京都大学の桂キャンパスが姿を現した（写真－１）。そこに立ち寄った帰り道、この近郊には竹林が多いことが頭をかすめた。桂駅前の陸橋も竹がモチーフになっている（写真－２）。環境省が実施した「残したい日本の音風景100選」ではいろいろ選ばれているが、京都のような歴史と文化に溢れ、祭りから寺社･仏閣、はたまた祇園と残したい音には困らない土地柄では何が選ばれているのであろうか。行きつくところやはり自然の音なのであった。それも竹林という漠然としたものと、後は日本海沿いの琴引浜の鳴き砂、兵庫県境近くの瑠璃渓の流水音と鳥の鳴声である。そして、数多い竹林から推薦のものが桂の地に点在している。

桂キャンパスでの学会などの帰路に、ふらっと竹林に身を委ねて休息することも一興と思い訪れてみた。

桂駅からバスで15分程、山方向にゆられて南福西町で降りる。そこから丘陵地を登っていくとすぐに竹また竹の世界が現われる（写真－３）。地面は朽ちた葉が積もりベージュ色に暖かく覆われている（写真－４）。その中を様々な竹垣に彩られて走る路は数キロにおよぶ（写真－５）。ジョギングや散歩する人と時たますれ違う他、竹林海を一人漂う趣きである。一瞬立ち止まり青竹の先を見上げると光が幾筋にも細くこぼれ、風神これを奏でるとき、林立する空洞が弾ける乾いた打撃音、さざめく枝葉音、全山いかばかりかと想わずにはいられない。

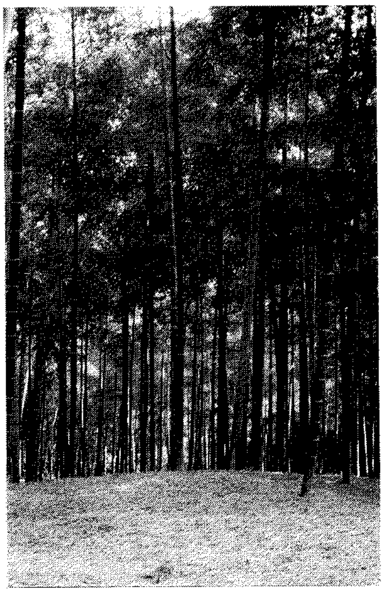
路の途中に洛西竹林公園がある。多くの竹種がきれいに管理されている。庭園を散策すると

写真－１

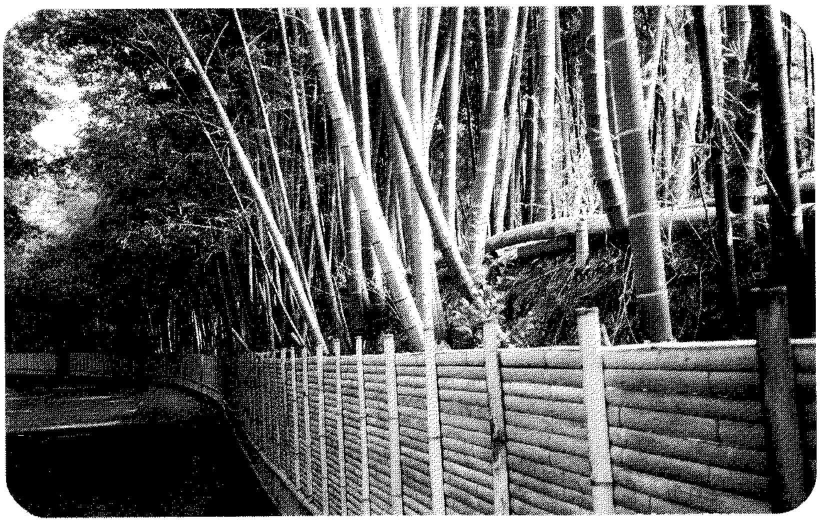


写真－２

写真－3

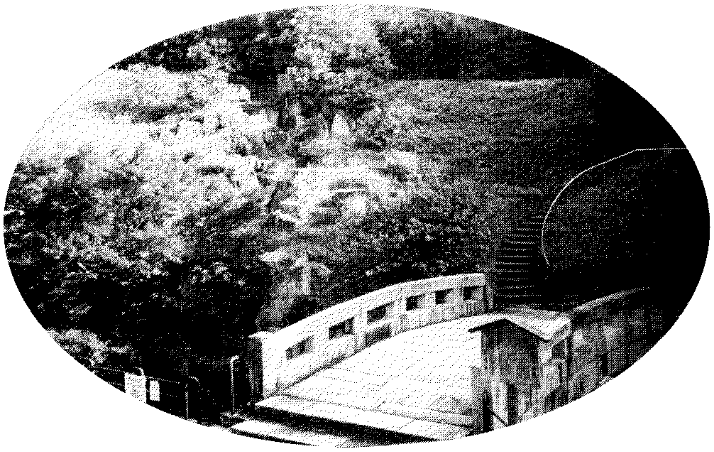


写真－4

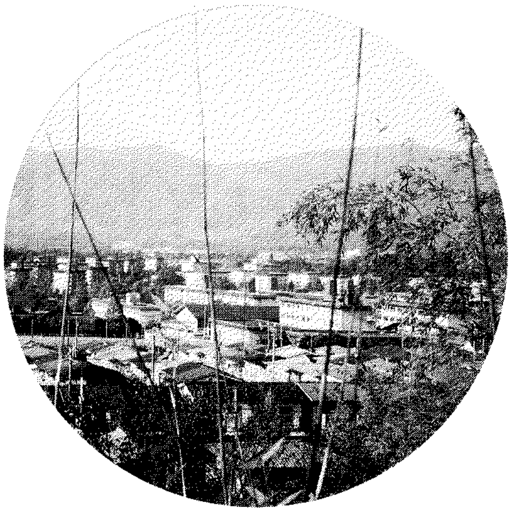


写真－5

写真－6



写真－7



写真－8

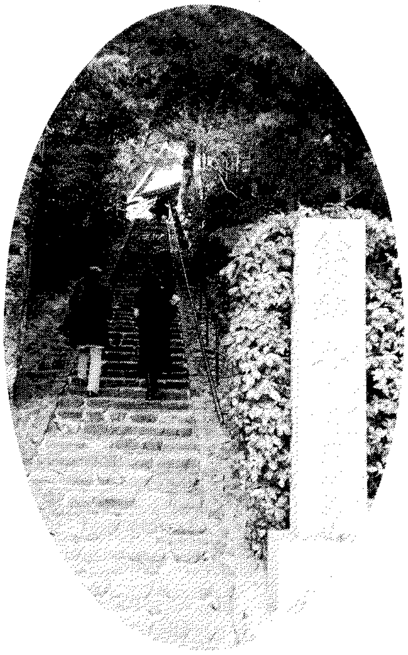
石仏群に出会う（写真－6）。織田信長が足利義昭のために築いた旧二条城の石垣に使ったものを安置している。池にかかる橋は百々橋（どどばし）といって、応仁の乱のとき、細川氏と山名氏との戦いの発端となったものを移築したもの（写真－7）。歴史と直結した世界だ。次に、展示資料館に入る。タケノコとして地上に出てから約3ヶ月で成長を終えてしまうことや、マダケには24時間で121cm伸びた記録があるなど驚かされる。また、竹は春に紅葉して、俳句などの季語「竹の秋」はこれを指すという。尺八や竹琴、竹太筒などの楽器から、茶杓、茶筅や花生、竹篭、御簾などなど竹製品が展示されている。変わったところでは、エジソン電球のフィラメントには6000種類におよぶ実験から京都八幡のマダケが使われ、40V・60Wで800時間点燈したということや、第二次世界大戦の鉄不足時にはマダケを割って代用品とした竹筋コンクリートが使われたこと（引張り強度は棒鋼の約半分ほど）など興味深い展示もある。館を出れば市街を一望に見渡す景色が飛び込んでくる（写真－8）。

さて、時間があれば桂駅から嵐山方向に一駅の上桂駅まで足を伸ばしてみることをお勧めする。そこで下車して歩くこと20分ほどで、西芳寺（苔寺）の入口に到着する（写真－9）。西芳寺は飛び込みでは拝観できない。門を通り過

写真－9

写真－11

写真－10



写真－12

ぎて裏手まで進むと、今度は一帯すさまじいばかりに茂った竹林と遭遇する（写真－10）。天から地へ無数の竹が突き刺さり竹滝の様相を呈していて、先を見透かすことができない（写真－11）。人手のかかった竹林と違い野性味が深く光もほとんど遮られる厳しい竹林である。

苔寺と並んで鈴蟲寺と呼ばれる華厳寺もある（写真－12）。27年かけて鈴虫の飼育に成功し、部屋には茶箱を一回り大きくした水槽状の飼育箱が9個置かれ、9000匹がオスメス同数で飼育されている。足を踏み入れると季節外れの鳴声に思わず天井を見上げてスピーカを探してしまう。鳴くのはオスで一年中鳴いているという。リーン、リ、リ、リーンと無限に鳴き続ける響きは声明を連想させる。

この他、雑踏に流され疲れを招くこと覚悟で、上桂より嵐山に抜けて渡月橋を渡り、有名な嵯峨野の竹林を訪れるのも一案であろう。

（財団　江沢記）